

The Women's Studies Association of Japan

学会ニュース 日本女性学会 第39号 1989年8月

発行 日本女性学会
事務局 東京都世田谷区太子堂1-7-57 154
昭和女子大学短期大学部生活文化学科
内藤研究室気付
TEL 03-422-5131 内線525
郵便振替 東京 8 - 49189
銀行口座 住友銀行日本橋支店 (普)451169
頒価 一部300円

1989年6月10、11日両日、法政大学で行なわれた春季大会は、日本女性学会設立10周年を記念し設立当初より長期にわたり代表幹事を務めた駒沢喜美、藤枝滯子両氏の対談を中心に行なわれた。折りから、世間を騒がせた「宇野問題」の影響もあってか、多数の参加者と、新入会員も20数名を数え、フェミニズムへの関心の高さを感じさせた。総会では宇野首相への抗議文を提出することについて決議するなどもあり、当学会が今後どのように女性解放へ向けての研究活動や実践活動を行なうべきかの課題を持つべきかも検討された。

ここには、対談当事者からの報告のほかに、大会後、学会に寄せられた参加者からの意見を収録する。今後、ニューズレター上が、充実した論争の場となるべく、投稿を期待したい。

また、待望の学会誌の編集委員会も始動し始めた。そのアウトラインを公表すると同時に、日頃の研究成果と新たな問題提起など、会員からの意欲的な応募を期待する。

フェミニズムをどう生きるか

駒沢 喜美

わたしは、自分のことを土着的フェミニストと想定している。あるいは実感的フェミニズムといってもよい。わたしにとってはフェミニズムをどう生きるかではなく、自分が好き勝手に生きてきてみれば、それがフェミニズムであったのだ。

おそらくわたしの年代の人間として、わたしは恵まれた環境に育ったと思う。経済的な意味ではなく、両親から何一つ嫉けられたことも教えられたこともない、つまり文化的ゼロ地帯に育ったのである。社会の規範も通念もわたしにはインプットされなかった。

たとえば戦争中、まわりの友人たちがみな、軍国少女となっていた時、わたしは自分だけ白旗をあげたいと思っていた。敗戦がやってきて、あの戦争は間違っていた、わたしの方が正しかったということになった。

この経験はもう一度やってきた。友人たちは皆、年頃になると結婚していったが、わたしは「結婚」だけは自分の身におこってはならぬと考えていた。なぜなら、結婚していった人たちのしていることは「飯炊き」であったからだ。一生涯、家族のための飯炊き女になることに、女たちはどうして従っているのか、わたしには不思議であった。わたしの人生は、いわば結婚を逃げるのがテーマであった。逃亡奴隷の心境で生きていたところ、20

年ほど前に、アメリカからウーマン・リブの声が聞えてきた。

あんな嬉しいことはなかった。逃亡者であったわたしの感覚の方が正しかったのだ、と確信がもてたからである。歴史がわたしのあとからやってきて、存在証明をしてくれたのだ。

この社会は男性中心に組上っていること、家庭にも職場にも、モラルにも美意識にも、髪型にも服装にもあらゆるところに性差別が入りこんでしまっていること、それを世界の人が認識したということ、これは人類史上画期的なことである。

わたしが一番やりたいことは、日本的性差別の特色や資本主義時代の性差別といった、固別なことよりは、そうした、各地の特色をもちつつも、それを貫く普遍的な法則をさぐりたいのである。性差別の本質と法則性。それを形成する有機的なつながりの総体、つまりは体系を明らかにしたいのである。

女はなぜか、あまねき愛をたれようとする。社会主義を救い、男を救い、地球を救い、etc。

だが、女は千手観音になる必要はない。まず自分自身を、女自身を救いたい。わたしにとってのフェミニズムとは、それではない。

フェミニズムの政治課題

藤枝滯子

近代が、資本主義が、女性を解放したか否か、といった一般論的な問題の立て方は不毛である。私にとっての関心は、日本の近代をかくも「日本的」にしたものは何か、日本資本主義をかくも「日本的」たらしめているものは、何かについて、フェミニズムの視点から考慮することである。それは、日本におけるフェミニズムの政治課題を明らかにしたいからにほかならない。

日本女性学会のここ何年かの総合テーマ「日本の文化的土壌とフェミニズム」は、その背後にある種のいら立ちをこめた「なにゆえ日本ではフェミニズムが可視的にならないのか」という問いかけを潜ませている。フェミニズムを国内はもとより国際的にも可視的にすることは、フェミニズムが日本の政治的風景を変え、「政治的風景の正当な領域」として社会的承認を得ることにかかっている。残念ながら、なかなかそうはならない。なぜか。国際比較でみると、日本では女性の社会進出の分野が限られ、集中する分野はゲットー化し、それ以外の分野では、きわめて層が薄い。たとえば政治の分野で見れば、衆参両院の女性議員は4名弱、地方議会では平均1名にみた

ない。欧米諸国では内閣の閣僚レベルで女性は何名かを論じているときである。マスメディアへの女性の進出率は世界でも最低の部類に属する。賃金比では、周知のとおり男性の半分、1975年以来男女格差を縮めるべく一貫して努力している欧米諸国に対し、格差がむしろ拡大しているのが日本である。

日本は性差をマクシマルに扱い、男らしさ/女らしさの区分にひどくこだわるジェンダー社会であることを特徴とするが、これを伝統文化とみるよりも、日本独特の雇用慣行である終身雇用制と年功賃金システム（男性を軸とし、基本的に女性を排除している）のセットを根幹に政治的に維持、補強、再生産されているととらえる必要があるのではないかと私は考えている。この構造と連動するのが学校教育（文部省により入念に管理されている）であり、ジェンダー再生産の起点としての家族、家庭である。日本のフェミニズムが可視的にならないのは、実はこうした日本資本主義の構造を相手にしているからにはほかならない。容易なことではないにせよ、フェミニズムが「あらゆる形態の女性差別撤廃」の方向で日本の政治的風景を変える条件は、この構造と連環にどこまでゆさぶりをかけられるかにかかっている。

日本におけるフェミニスト・ストラテジーとは、要するに蟻の一穴を多方面にふやし、堀りつづけることだろう。一方では国会をはじめあらゆる政策決定機関、マスコミのあらゆる分野への女性の進出等による社会意識変革の働きかけ、他方では日常の場でたたかいつづけることの積み重ねの中に、将来への希望をかけた。

<投稿>

フェミニズム——それは性別役割分担をなくすこと
竹内陽子

6月10日の日本女性学会での『フェミニズムをどう生きるか』での藤枝さんと国信さんの発言に対し、ここで問題提起してみたいと思います。

私は、0才児から3才児を預かる企業内保育園に保母として勤務し、日々、同じ「学校」という枠の構成員であり乍ら、男は、仕事をしているだけで、『夫』としても『父親』として評価されるのに対し、女が、仕事・家事・育児と、実に男の3倍、働いている姿をみえています。そこから、フェミニズムとは、『女と男の性別役割分担をなくすことだ』と出てきました。

駒尺さんの「女は飯たき女だから、私は結婚しなかった」との発言に対し、国信さんが「いや、もう結婚のイメージは変わった」という発言がありました。私は、現実には男の3倍（仕事・家事・育児）働いている女たちを見ていて、本質的なところで、現在の結婚も女は「飯たき女」にすぎないと思います。

私の保育園には、国内外へ出張する母親が何人かいます。母親の出張中、子供は誰が世話をするかというと、「おばあちゃん」なのです。子供や母親と同じ「家族」の構成員である父親は、この問題から飛ばされ、『女の問題』は、『女』によって処理されてゆくのです。アグネス

論争の時もそうでしたが、育児や家事の話は、男を抜いたところで議論されるのです。これは、家庭内において、女と男の性別役割分担が、歴然とあるという事実であり、女はまだまだ「飯たき（家事・育児）」をしっかりと役割として背負っているということではないでしょうか。

藤枝さんの発言で、「企業が打ち出す男にとって都合のよい女のイメージが、女の社会進出を妨げている」というのがありました。私は、これは、「地盤」に性別役割分担の意識がしっかりと根づいているからこそ、企業の情報も、多くの人々の心に受け入れられているのだと思います。

2才6ヶ月の女兒に、汚れた服を「パパかママに洗ってもらおうね」と云うと、子供はムツとして、「ママがお洗濯!」と答えました。3才2ヶ月の男児が、ままごとの時、絵本を持って、床に寝ころんで、「パパ、新聞読むの」と云ったことがありました。同じ男児が、3才5ヶ月になった時、馬になった私の背の上で「たけし、男なんだ。男は馬に乗るんだよ。女はそれを見ているんだよ」と云いました。毎日の生活の積み重ねの中で、子供が、女は世話をする人であり、男は世話をしない人であると感じていたことが、現在の女と男の構造的な姿をも捕えていったとは考えられないでしょうか。子供は、馬に乗って体験をしたからこのような発言をしたのでなく「頭」で考えて発言したのです。子供といると、毎日積み重ねている何げない体験が、大きな意識となって人を支配してゆくように思われます。女と男の性別役割分担をなくしていかない限り、女は永遠の飯たきであり、男にとって都合のよい女であり続けると思います。

<投稿>

「冠つきフェミニズム批判」の危険性

秋山洋子

6月10日の女性学会十周年記念シンポジウムの席で、田嶋陽子さんの論文「冠つきフェミニズム批判」が参考として配られ、これについて私を含めて数人が言及した。それに対して田嶋さんから「多様性とかなあなあ主義はもうたくさんだ、きちんとした批判をしてほしい」と反論があったが、時間の制約もあり、そのままになってしまった。私の発言もフェミニズム内部で立場の違いをはっきりさせて議論するのは必要なことだという主旨だったので、会場では言い足りなかったことをまとめてみたい。

田嶋論文を私なりに要約すると、こういうことになると思う。田嶋さんが怒っているのは、日本のフェミニストの一部にある「反近代主義」、具体的には女の企業進出や企業内での昇進を資本主義体制を支え第三世界の搾取につながるものとして拒否する考え方に対してであり、そういう反近代的主義者の例として、エコロジカル・フェミニズムやマルクス主義フェミニズム（これを彼女は冠つきフェミニズムと呼んでいる）をあげて批判している。

この前半の「反近代主義」批判については私も別に異

女性像をめぐる超越と内在

村上益子

①ボーヴォワールの超越とポイテンディクの内存在。

ボーヴォワールの自由論は、絶え間なく事物的存在としての自己=内在を超越してゆくということにあった。これに対してポイテンディクは絶え間のない超越という運動は人間存在の力動の一つの側面に過ぎないという。それは「意図された目的への休息を知らぬ拡大」を目指す態度、つまり「労働」の世界=実用の世界=男性的、目的志向的合理主義の世界であるという。彼はボーヴォワールの見落とした点は「仕事」以外の世界の意味、すなわち「静止」と「内在」の意味だという。

②男性的一神教の理性の破壊と内在の氾濫としてのクリステバ。ノイマンによるとヨーロッパの男性的一神教は、母権的集団に対抗しようとする男性の利害によって、男性集団と共に発展し、男性の意識と自我を強化してきたものであるという。それ故にクリステバは、女性的なものとは、この男性的一神教を基盤とする象徴秩序からはみだすものと規定する。それは無意識の奥深い《地下の因果性》であるディオニソスの陶醉の世界である。彼女の女性論は、男性的一神教への同一化を拒否すると同時にこの「母たちの国」をも拒否するという一種の両性具有的浮遊の試みの中にある。

③内在の二つの類型。同じく内在といっても二通りある。全体的なものと個体的なものがある。全体的内在は自転する生命全体をも表わし、個体を生みだしもするが、—それ故に女性的といわれるが—同時に個々人を呑みこんでゆくものである。それは一つの全体感情を持ち、実際に個人が固有の感情を持つことを抑圧するものである。呑みこんで他人を犠牲にするばかりでなく、自分も全体感情の中に埋没して個としての主体性を失ってしまう。まるでそれは親子無理心中の心境に似ている。男性的全体性は個々の成員を部品として手段化するが、女性的といわれる感情的全体性は、個々人を感情的に融解する。日本の場合、女性の個としての自立は、この感情的全体性からの自立=母からの自立が特に重要である。それは理性の力によって感情をのり超えることではなくて、自分独自の感情と価値観によって集団の空気をのり超えることである。個的内在の質変革が全体的内在性からの脱出の道である。

④女性的理性の方向。ボーヴォワールの超越にあってはプランを実現させる過程だけが「自由」であって、実現された成果は自由の化石=内在にすぎない。しかし実現された成果はプランよりより高度なものではないか。成果において充足し、それを活用し、そこに遊ぶという行為はプランに生きる男性的理性を包括するより高度の充足性を持つものではなからうか。この実現された内在は充足感にみちたものであって決して化石ではない。

議はない。今の日本で必要なことは、企業、官庁、学界などで影響力を行使できる地位にどんどん女が進出することで、その逆ではない。ただ、その進出した場で、フェミニストとして影響力を行使するか、サッチャーになってしまうかが問題のわかれ目なのだと思う。

田嶋論文の中で私が問題だと思うのは、ここでのエコロジカル・フェミニズム、マルクス主義フェミニズム批判があまりに皮相的だということだ。例えば、エコロジカル・フェミニズムの戯画として、「夫が保父になり、妻が家で玄米を炊く」と表現しているが、これは明らかにエコロジカル・ショービニズム（男性排外主義）であってフェミニズムではない。もしエコロジカル・フェミニズムを戯画化するなら「夫も妻も4時間づつ稼ぎ、二人で畑を耕し玄米を炊く」ではないか。

マルクス主義フェミニズムの立場からは、会場で久場さんから反論があり、マルクス主義フェミニズムは男の思想の借り物ではなく男によるマルクス主義が見落とした家事労働や出産、育児といった労働の意味をもう一度問いなおすところから出発していると語られた。私の知る限りでは、マルクス主義フェミニズムは、従来の「社会主義革命が起これば女性は解放される」という社会主義的女性解放論の破産したところから出てきたもので、ソ連や中国の女性が資本主義国の女性より解放されているなどとは言っていない。マルフェミが資本制と家父長制の相互作用を指摘してその支配がより悪質になったというのは、近代前のほうが抑圧が少なかったということではなく、近代のほうが抑圧がより巧妙に見えにくくなっているということだ。

田嶋さんは「男権支配の根絶、父権制の撤廃こそ、フェミニズムの真髄なのである」と言っており、私はこれは正しいと思う。そして、エコロジカル・フェミニストにしても、マルクス主義フェミニストにしても、この点を認めるからこそフェミニストを自認しているのだ。その上で、あるいは分析の武器としてマルクス主義を利用し、あるいは人間同士の関係と同時に人間と自然との関係をも視野にいれた理論体系を作ることをめざしているのではないだろうか。こういうフェミニストと、既存の思想の活性化のためにフェミニズムを利用しようとする人たちとは、まったく別なものである。時には、その区別が見えにくいことがあるかもしれないが、それに対してこそ私たちはフェミニズム批判の武器を研いでおく必要がある。「冠つきフェミニズム」というレッテルは、本当のフェミニストと似非フェミニストをいっしょに批判してしまう危険性を持っていると私は考える。

物作りの現場からの報告

一製品開発へのフェミニスティックな視点を探る

右衛門佐美佐子（プロダクト・プランナー）

・物の意味をデザインする時代

インダストリアルデザインというと物の形状や色をデザインするというイメージを持つ人は多いが、現在では、かつてのように機能主義に陥り外側のスタイリングをするだけではない。技術スペック先行型でデザインされると使い易さや商品性にも限界がある上、マイクロエレクトロニクス技術の発達、デザインをいわゆる機能から切り離し、良く言えば自由な造形ができるようになり、悪く言えば造形の拠り所なき時代となっている。このため、デザインとはスタイリングをすることではなく、その物の意味性をデザインすることが重要となって来ている。意味とは、その物が社会の中で一体どう機能し、象徴的役割を背負うべきなのか、マーケットの中ではどの位置を占めるのか、ユーザーとのコミュニケーションはどんな具合に持つていくのかというようなことである。この所企業のデザイン部門でもプロダクトセマンティクス（形態を機能だけでなく人間社会の象徴的環境で考えていくこと）が話題になるが、これも意味のデザインの模索の表れと言えよう。

・女性マーケットの変遷

戦後間もなく始まる家電のブーム（三種の神器、3C時代）は「主婦を解放する」「洗濯しながら本が読める」洗濯機といった謳い文句から始まり、主婦の家事労働はフィジカルな部分ではかなり軽減されたと言えよう。まだ機械は機械らしい顔をしており、形態的には、アメリカの流線型の影響はあったものの、素朴で正直な、ある種の健全さが伺えるデザインであった。高度成長を迎えた大量消費時代に入ると、女性誌の影響も相まって女が次第にマーケットの中で力を持ち始める。買うのは女という図式は、しかしながら作るのは男という図式を裏に秘めたもので、物依存型の消費的で、メカに弱いターゲットとしての女は、今日でも企業の格好のお客様である。女の心を掴む為に女性の開発チームなどが編成されるが、実態は予算権も、プロジェクトチームの人事権も握っている例は少なく、相変わらず上にいるのは男性である。

・今後の課題

以上のような状況の中で、物のプロデュースをする側としては次のような事を考えたい。

1. 物の形態において、男がこうあって欲しい、女とはこういう物を好むだろうといった安易なスタイリングの拒否
2. 男女性別分業体制を前提とする物作りへの異議申し立て（家電など）
3. 一つの物、一つの技術が果して女性を解放したか、解放する方向にあるのか。恩恵を受けたのは男女どちらで、とばかりをうけたのはどちらか。（OA機器など）
4. エコロジカルな物の開発
5. 差別的なコンテキストで慣らされないためのマンマシンインターフェイス（情報機器）

国立婦人教育会館の設立に及んだ国際的、国内的影響 猪飼美恵子

この研究は歴史的研究であり、国立婦人教育会館の設立に及んだ国際的、国内的影響を調べたものである。国立婦人教育会館は1977年7月に文部省の付属機関として設置された。その目的は婦人教育の振興の為婦人教育指導者に対する実践的研修、婦人教育に関する専門的調査を行う事にある。

会館の設立は女性の役割変化と社会参加の増加を含んだ社会的必要性により影響を受けている。国連婦人の十年の活動により婦人教育の国際化、婦人団体の役割、情報ネットワーク強化が影響を受けている。他の国際的影響は中近東やアジア諸国と日本との国際的関係の変化、外国における日本のイメージの強化があげられる。国内的影響は社会的、経済的トレンド、婦人団体からの支持、公的または私的な婦人センターとの関連性、短大や大学における女性学講座、国内行動計画、高齢化社会、そして男性と女性の関係性である。国際的、国内的影響はバラバラなものではなく、それぞれにからみあっている。

国立婦人教育会館の設立は、日本政府の国連婦人の十年（1976—1985）に対応する国内行動計画の重要項目の一つとして、そして婦人教育を推進するために女性のための教育施設が欲しいという婦人団体の長年の要請によるものだった。会館の設立への社会的影響をより良く理解する事は女性にとってより成功する、より効果的な学習プログラムを婦人教育指導者が作るのを助ける。なぜならば社会的影響は二つの側面を持ち、プログラム開発を助けもするし邪魔だでもするからである。この研究の社会的影響の分析は教育政策決定、経済状況、社会変化、トレンド、文化価値と会館との関連性を含む。これらは会館のプログラム開発に直接的あるいは間接的に影響を及ぼしている。

この研究結果からの提案は、プログラム開発と研究の強化である。このプログラムとは婦人教育を生涯教育の一端としてとらえる事、サービスの強化、婦人団体の支持、高齢化社会との関連、情報サービス、国際的情報の交換、そして会館のプログラム報告の改善である。研究への提案は、婦人団体との関連性の強化、婦人センターへのサービス、男性と女性の関係、他国との連携による国家的な比較調査である。

新聞紙面に現れている見える性役割・見えない性役割 本郷みどり・小柳孝子

新聞記事の中にある、様々な形の性差別表現を「見える・見えない」という観点から3つに分類した。

第1に、「女であること」を強調するような表現がある。「女性社長」「女子高生」というように、「女性冠詞」を付けるもの、女性の容姿についての詳細な記述、母親の役割を述べるものなど、男性にはあまり見られない表現が、女性に関しては数多くある。

第2に、女性が表面に出てこない記述がある。家の、いわゆる世帯主や子どもの保護者として報道されるのは

ほとんど男性名である。ある女性を表すのに「○○さんの妻」という記述すらあった。

第3に、女性と男性とでは、敬称や呼び方が違う、ということがある。女性の「さん」に対して男性の「氏」、女性を名前と呼ぶのに対して男性を姓で呼ぶなど、性によって使い分けがなされている。

「女」を強調する、というのは男性から女性を区別し女性に対してより強く性役割を期待することを示す。また、世帯主などが男性名なのは、「男は主、女は従」であることを表すといえよう。さらに敬称や呼び方の区別は、女性を身近なもの、「公（男性）」に対する「私」的なものとして扱うという性役割の表れなのである。

女子が、いわゆる「女子向き」とされる事務、販売・サービスの職種や、パート・アルバイト等の臨時的就業形態に押し込められている状況は、均等法施行後も変わらず、男子との格差は依然存在している。また、求人広告に掲載される賃金にも大幅な男女格差があり、1986年には格差が縮まるどころかむしろ広がる、という結果になったことにも注目する必要がある。

また、求人広告欄の記述において、女子にのみ不利な条件を付したり、結果的に男性を優先するような巧妙な求人が見られたことも付け加えておく。

以上のように、新聞の求人広告欄において様々な男女格差が生まれる原因として、一つには、男女雇用機会均等法が努力規定であること、もう一つには、新聞自体が無批判的に求人広告を掲載することが挙げられる。男女雇用機会均等法は罰則付きの強行規定の明文化を、各新聞社には新聞広告倫理綱領の遵守をと求めるものである。

ビデオを観ながら女の性（生）について語ろうよ！

北沢杏子

「アッマにくるようなのみせて」「むかつくのを！」

参加者たちは開口一番こういうのだった。私はビデオ製作者でもあるので、当日は私が脚本・演出を担当したビデオ20本と、資料として翻訳・編集した欧米のビデオ10本を持参した。その中から参加者の要望にそって上映し討論しようというわけだ。

最初に「Woman: Who is me? (アメリカ)」を観て、古代ギリシアから今日まで、男の画家によって女はどう描かれ、彼らの望む女性像を演じてきたか——を話し合った。

つぎに、知恵おくれと呼ばれる精神発達障害者の作業所「でんでん虫の家」で私が定期的に行なっている勉強会の記録「サークル・人間関係の学習」を観た。ここでは知能遅滞の女性たちが、いかに性暴力（強姦）の対象にされているかを話題にし、欧米に押しよせているノーマライゼーションについて、私が報告した。

ついで「Sex and the Handicapped (スウェーデン)」を観る。盲学校の生徒が裸身の男女（ボランティアの大学生）の体にさわりながら、性器の説明を受けているシーンや、オランダの施設で、脊髄損傷で寝たきりの男女を同じベッドに入れて室を去る介護者の淡々たる態度に

感嘆の声が上がった。人権としての性を主張することは、障害者、健常者にかかわらず人間解放につながるという意見が出された。

このようにビデオを観ては討論するという形で進行していき、最後に'88年度教育映画祭優秀賞受賞作品「ドキュメント・出産」を観た。これは私の娘の生き方と出産の記録だが、参加者はやはり泣いた。母性解説講座なども盛んな昨今だが、母性神話をしっかり身据えた上での出産の意味を語りあった。

二時間の分科会の中に参加者たちが共有した怒り、驚き、感嘆、感動……「人間っていいな！」が私の感想である。

ワークショップ「広告ウォッチングプロジェクト」

深沢純子

街中には相変わらず、性的興味の視線にさらされた女性のイメージが溢れている。女性を性的対象としたイメージ、固定した性役割を踏襲した男女関係のイメージの繰り返しに対する、ステッカー張りのアクションが、地下鉄のポスターを降ろさせるなどの成果もあり、この一年間で、この問題に対する世論の関心はだいぶ高まった。しかし広告の送り手は、「金余り」のためもあって、空前ともいわれる膨大な広告出稿量を背景になりふりかまわず制作におわれているのだろう。告発する側とのイタチごっこが続く。

当日は30名余りの参加者ととともに、「たまたま男、たまたま女」というコピーの東京都婦人週間のポスターについて感想や意見を自由に出しあった。このポスターは男女のステレオタイプのイメージを踏襲していることに加え、幼児虐待のイメージに、不快感の声が多かった。また業態転換をはかる重工業系の企業がソフトイメージをアピールするために、広告に女性の肉体をモチーフに使用しているものもとりあげた。これらは何ら具体的に商品との関連も見いだせず、ただいたずらに女性のイメージを造形的に操作しているにすぎない。消費者に明確に、具体的に伝えるものがなく、「目立たせる、人目をひくには女の裸」という男の論理だけが生きている。

先の東京都のポスターについての抗議のやりとりの過程で明らかになったことは、行政の政治的なポスターが、電通という一社に任されていること、さらに依頼者としての東京都の担当部門の中に女性スタッフがないことであった。短期スパンの企業広告ではないにもかかわらず、そしてより強く啓蒙的意味を果たすであろう行政の広告が、人々の目に触れる前に、何ら女性の側からのチェックも受けずに公開されてしまうのである。改めて制作者や、依頼側の意志決定の機関に、意識を持った女性が進出していくことの必要性が強調された。今後も新しいステッカーを製作し、直接行動を続けること、そして昨年と同様にフィールドサーベイも計画している。

今後は「出てきたもの」に対する後追いの抗議のほかにも、メディア制作の際に「差別的イメージ」を生まないための規準を提言するなど、積極的な方法をとる必要が

あるだろう。また今秋に来日するアメリカの「メディアウォッチ」のアン・サイモントンとの意見交換も予定されている。

総会報告

1988年度活動報告、決算報告承認。1989年度予算承認。活動方針としては、「日本の文化的土壌とフェミニズム」のテーマを保持しながら、秋には「女性の人権とメディア表現」をとり上げるとの方針が示され、論議の上、承認。学会誌発行についても編集委員会から方針が示され、さらに会報で明示して会員の意見を求め、経費節減の工夫をこらしつつ進めることを承認。事務局移転に関しても承認。

船橋邦子会員より緊急動議として、宇野首相宛の買春問題に関する抗議文を学会名で同首相宛送ることが提案され、承認。

内規に従って、明春の第6期幹事選出のための選挙管理委員として、猪飼美恵子さん、平川和子さん、ゆみこ・ながい・むらせさんが選ばれ、幹事会からの北沢杏子さん、桑原糸子さんを加えた五名による委員会が発足した。

日本女性学会1988年度決算報告

(1987. 4. 1～1988. 5. 31)

収入の部

費目	予算	決算	備考
前期繰越	253,331	253,331	
会費	550,000	852,500	納入率1988年度約70%
大学助成金・カンパ	50,000	6,340	カンパ2540 国立婦人教育会館宿泊キャンセル料3,800
活動収入	大会参加者 100,000 ニュース売上 20,000 講演会 20,000	56,000 89,250 18,000	春期大会26,000 秋期大会30,000 レオナード氏講演500円×36名
雑収入	3,000	9,590	銀行利子322 郵便利子9,268
合計	976,331	1,285,011	

支出の部

費目	予算	決算	備考
大会・総会費	80,000	89,810	講演謝礼30,000 アルバイト23,740 通信雑費36,070
幹事会費	150,000	132,378	交通費補助125,000 通信雑費 7,378
学会ニュース	印刷費 220,000 発送費 80,000	322,118 55,130	№34 70,000 №35 137,500 №36 43,000 №3 31,500 №38 38,118 臨時 2,000 (ハガキ)
事務局費	80,000	57,524	事務所維持費14,000(14ヶ月) 雑費、通信43,524
学会誌積立て	300,000	300,000	
予備費	66,331	20,000	レオナード氏謝礼
合計	976,331	976,960	

1988年度収支決算

収入 1,285,011
 一支出 976,960
 308,051

特別会計

収入の部

積立金繰越	700,000
本年度積立金	300,000
合計	1,000,000

支出の部

学会誌発行	1,000,000
-------	-----------

日本女性学会1989年度予算

(1989. 6. 1～1990. 5. 31)

収入の部

費目	金額	備考
前期繰越金	308,051	
会費	550,000	5000円×110件
助成金・カンパ	100,000	
活動収入	大会参加費 100,000 ニュース売上 30,000 講演会・その他 20,000	1000円×50人×2回 300円×100部
雑収入	10,000	預金利子
合計	1,118,051	

支出の部

費目	金額	備考
総会・大会費	120,000	講師謝礼40,000 アルバイト料40,000雑費40,000
幹事会費	150,000	交通費補助130,000 幹事会ニュース20,000
学会ニュース費	320,000	印刷費230,000 発送他90,000
事務局費	100,000	雑費・通信他60,000 移転等の費用40,000
幹事改選費	120,000	名簿印刷70,000 発送費他50,000
学会誌積立金	300,000	
予備費	8,051	
合計	1,118,051	

宇野首相退陣要求決議のその後

船橋邦子

6月10日総会緊急動議として提案した「宇野首相即時退陣要求」は反対意見もなく承認。内容証明付きで日本女性学会から以下の内容で首相官邸宛に送付した。

その後宇野宗佑氏より受けとったという返事(内容証明に対し)があったのみである。しかし私が想像していた通り、いやそれ以上に首相の買春問題への日本の女性たちの反応は速く、怒りがあり早晩宇野さんは憲政史上初めて買春でやめさせられた首相として名を残すことになるでしょう。(もちろん本人は違う理由を付ける)

ただ今回のこの事件発生に対し、私は一人一人の日本の女性が「買春」という問題、また首相が買春したという行為に対しどのような認識をするか問われることになったのは私には興味深いことだった。6月11日から21日までバルティモアで開かれた全米女性学会に行き、そこで20人位のアメリカのフェミニストに宇野問題のインタビューをした。

結果は日米の女性たちの意識の差(違い)を示しておもしろい。アメリカの女性は誰一人A子さんを批判する人はいなかった。むしろ彼女の「スピーク・アウト」に拍手を送り、日本の女性にはA子さんをサポートしてほしいと語っていた。

一方日本の女性たちの中には「売春」行為が認められ

ない、認めたととしても自分とは違う対岸の人という考え方が強く、ややもすれば女も男も五分五分、女ももっと清く正しく生きるべきという声が聞こえたことだった。

こういう考え方は問題の本質をボカしてしまい、何もしないの首相の買春行為を批判したことにならない。日本人の男性に（特に知識人と呼ばれる人たち）多い発言でさもバランス感覚があって、物事の両方を見て自分は正しいかのような錯覚に陥ってしまう。結局何も言ってないことと同じで単に自己防衛思想が強いだけだ。

この立場にたつと歴史を動かすことにならない。

そもそも今回の問題の本質は日本のリーダーである首相が買春をしていた、そして彼の意識は買春男性がそうであるように「金を与えれば自分のもの」という考え方で女性を人間扱いにできなかったことである。

日本の政治は「待合政治」ともいわれる程政治家と芸者との関係は長く深い。マスコミも従来一切この問題にはふれたことはなかった。しかし嬉しいことにA子さんの勇気ある行為で今歴史は大きく変わろうとしている。

男が女を買うという買春は性差別、人種差別などあらゆる差別がなくなる限り、消えはしない。両者の間に存在するかの不均衡さこそが問題なのだ。また金を媒介として契約関係が成立しても、そのことで何人も全ての人としての権利を奪われることはない。

この問題は宇野の「買春問題」であり、日本の「男性問題」であって「女性問題」ではないのだ。

そしてまたこの問題が出てきたからといって、中曽根、竹下さんらリクルート問題への責任が不問にされるようでは困る。久しぶりに歴史をつくることに参加しているという実感が私の中にパワーをみなぎらせてくれるようだ。周囲の女の人たちも皆元気そう、とても嬉しい。

【宇野首相にあてた抗議文】

前略

私達は六月九日参院本会議における久保田真苗さんの代表質問に対するあなたの対応が、女性の人権を無視したものとして抗議します。

新聞報道によれば久保田さんは売買春について首相の考え方を問い、それとともにマスコミが取り上げた宇野氏自身の問題を伺いました。ところがあなたはそれを「私的な問題」として回答を拒否しました。

私達はこの問題を単に私的な事として無視するわけにはいきません。性を金で買うことは人権をふみにじるものであり、女性として許すことのできない行為です。

あなたの言動はセックス・スキャンダルの問題ではなく、人間として、政治家としての首相の基本姿勢・政策にかかわる重要な問題です。

私達は首相自身がこの問題に対して国会で答弁し、明確な回答を出されることを要求します。

もしそれが実現されないならば、国を代表する首相として不適格な宇野さんの即刻、退陣を要求しま

す。

日本女性学会

1989年6月12日

日本女性学会学会誌について

既に学会ニュースでもお知らせしました通り、日本女性学会設立10周年を迎え、学会誌を創刊することになりました。

学会の目的である「あらゆる形態の性差別をなくし、既成の学問体系をこえた女性学の確立をめざし、そのための研究および情報交換を行う」(日本女性学会規約第二条)という主旨に沿う学会誌を、同規約第三条(3)にある、学会活動の一環として出すものです。

刊行は1990年を予定しております。

以下に編集委員会にて決定いたしました論文応募規定等についてお知らせします。

会員の皆様、ふるって論文等を応募して下さいよう、お待ちしております。

論文等応募規定

1. 論文等応募者は日本女性学会の会員であること。
2. 応募論文は未発表のものであること。
3. 応募論文等の紙数制限
 - a. 論文：400字詰め原稿用紙40枚以内
(含、注、参考文献リスト)
 - b. 書評：400字詰め原稿用紙5枚以内
 - c. 国内、外女性学情報：b. に同じ
*横書きを原則とする
*ワープロ原稿可
4. 論文掲載者は学会誌10冊以上購入を条件とする。
論文以外の原稿掲載者は5冊以上購入を条件とする。
5. 原稿締め切り日：1989年9月30日
発行予定：1990年3月31日
6. 問い合わせ、送付先：学会事務局

編集方針

1. 原稿の採否は編集委員会が決定する。
2. 論文に関してはコメンテーター制をとり、その人数は一論文につき複数とする。
3. 掲載論文本数はおよそ7本(英文サマリー付)
その他、情報は各5本程とする。

~~~~~

日本女性学会誌編集委員会 会議報告

1989年7月1日(土)12:00~17:00

於：名古屋市勤労婦人センター

出席者：小林、溝口、国信、福井(欠席者：亀山、中安)

討議決定事項

1. 編集委員6名で、代表制はとらない。  
(氏名) 亀山美和子、国信潤子、小林富久子、中安みどり、福井浅子、溝口明代
2. 学会誌の概要

内容等については上記の通り、その他サイズは横15cm、縦21cmとし、ページ数は約140ページとする。横書きを原則とする。

3. 予定販売価格は、1500～2000円とする。
4. 広告は女性学に関わる発行物のある出版社から可能ならば、数本とる。その他についてはその都度検討することとする。女性の尊厳を傷つけないものであることが条件。
5. 会誌名については目下検討中。「日本女性学会誌」、「日本女性学」、「女性学」等があがっている。
6. 印刷所、流通、販売についてもただ今、鋭意検討中。  
(文責 国信)

---

## 事務局から

会員の移動  
《新入会》

《住所変更》

## 幹事会ニュース

○臨時幹事会 6月10日 11:00~12:00

場所：法政大学80年館

出席者：井上、亀山、河野、北沢、桑原、国信、田嶋、中安、深沢、船橋

### [議事概要]

'88年度決算案及び'89年度予算案を検討、修正、承認し総会にかけることにした。会計年度変更に伴う会費徴収はしないこととする。

○幹事会 6月11日 16:40~18:10

場所：法政大学58年館

出席者：井上、加藤、亀山、河野、北沢、桑原、国信、田嶋、内藤、中安、深沢、船橋

### [議事概要]

①春季大会について

- 大会参加者は、両日で130名。非会員は6/10、65名、6/11、28名。当日会場で約20名の新入会員があった。
- 10周年記念パーティーへは、51名の参加があったが、席上、会員からの選挙演説があったことについて問題視する意見や、会員個人の政治活動は自由だが、女性学会の名前を使用することについては慎重であるべきとの意見があった。
- 個人研究発表、ワークショップとも、内容は充実していたが、今後は開始時間を守ることに意見が一致。

②総会について

- 今回は活動方針についての論議が活発であった。
- 学会誌についての概要案を提出すること。(別項参照)
- 学会誌費用として、毎年30万円を支出することができる。
- 総会成立の定数はないが、次回からは、参加者数を把握する。

③その他

- 今回の大会に、北沢杏子会員より看板、人件費他、計約4万円のカンパがあった。
- 次回幹事会は8月29日(月)午後1時~4時、昭和女子大学内藤研究室にて。

## 寄贈資料

### 《寄贈図書》

藤原輝男、北沢杏子「チボリ フィリピンの少数山岳民族の自立を支援して」アーニ出版 著者北沢杏子さんより

亀山美和子「ルポルタージュ看護婦」有斐閣 著者 亀山美和子さんより

### 《寄贈資料》

国立婦人教育会館所蔵図書目録 第8編 国立婦人教育会館

国立婦人教育会館ニュース 第45号 国立婦人教育会館

平成元年度国立婦人教育会館事業計画 国立婦人教育会館

えがりて 65 総理府婦人問題担当室  
VOICE OF WOMEN No.102 日本女性学研究会  
月刊婦人展望 '89.5月号、6月号

市川房枝記念出版部  
女性学評論 第3号

神戸女学院大学女性学インスティテュート  
あなたとわたしと性 8号-10代の性を考える- 性を語る会

国際女性学会ニュースレター 1989年5月、6月号 国際女性学会

関西女性学研究会ニュース vol.3 関西女性学研究会  
フォーラム通信 6号 横浜女性フォーラム

Voice (住民票続柄裁判交流会通信) 第3号 住民票続柄裁判交流会

昭和63年度新宿区女性の海外事情視察報告書 新宿区立婦人情報センター

全国婦人新聞 第895~901号 全国婦人新聞社  
男女の賃金格差 (岩手日報「日報論壇」1989.6.1掲載論文)

著者 照井孝保さんより

## 連絡、募集

- 平成元年度女性学国際セミナー開催 (1989.9.11. 23~26) と参加者募集(詳細はインフォメーション参照)
- ミズ・オープンスクールの開校 (1989.9.11) と受講者募集

# Information

## ■日本女性学会誌への投稿を!!

論文、その他とも、メ切は9月30日です。

詳細は7ページの記事参照。お問い合わせは、事務局か、編集委員まで。

## ■秋季大会の企画を募集します!

1989年12月2、3日、京都精華大学にて。

テーマ「女性の人権とメディア表現」のもとに、セミナー研究発表、シンポジウムなどの企画をお寄せ下さい。その他、個人研究発表、ワークショップ等も募集します。ハガキ、または封書にて、8月25日(金)までに事務局まで。

## ■女性学国際セミナー開催のお知らせ

期日：1989年11月23日(木)～11月26日(日)3泊4日

対象：国際セミナー参加者 100名(公募)

国際セミナー公開シンポジウムのみ参加者  
500名(公募)

主催/会場：国立婦人教育会館

テーマ「性役割を変える——地球的視点から——」

海外からの報告者7名を加えた内外からの報告をはじめ、女性の生活をめぐる諸問題について地球的視点から学際的考察を行ない、今後の方向について研究討議する。

一部タイトル紹介

- 「開発と性役割—再生産のポリティカルエコノミー」  
ファリダ・アクター氏(バングラディシュ)
- 「過去40年間における性役割からジェンダーへの概念化の変遷」  
クリスティーヌ・デルフィー氏(フランス)
- 「現代日本社会における性役割」  
上野千鶴子氏
- その他、「家族」「労働」「セクシュアリティ」「教育」  
などのテーマに分かれたセッションを行ないます。

問合せ先・申し込み：国立婦人教育会館事業課

TEL04933-62-6711(代表)

## ■事務局が転居しました!!

日本女性学会

〒154 東京都世田谷区太子堂1-7-57

昭和女子大学短期大学部生活文化科

内藤研究室気付

## 編 集 後 記

学会総会の緊急動議で宇野首相退陣要求の決議をして以来、都議選、参議選を経て要求は現実となった。早速全米女性学会でインタビューした友人から“おめでとう”と便りをもらった。“オバタリアン”とどう男たちが悪口を浴びせようとも着実に、確かに歴史は今女たちの力で変わろうとしている。開かれたドアの内実こそ、今女性学を担う私たちが膨らませる責任を痛感している。建設的・生産的なフェミニズムの討論をより活発化させたい。

(F)